法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

山本弘文先生の沖縄研究をたずねて

東，喜望 / アズマ，ヨシモチ

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
42
(開始ページ / Start Page)
515
(終了ページ / End Page)
523
(発行年 / Year)
2015-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010715

Hosei University Repository

山本弘文先生の沖縄研究をたずねて

東　喜望

山本弘文先生のお名前を初めて知りましたのは、今を去る四十余年前の昭和四十二年夏でした。

当時、川崎木月の法政の高校で教鞭をとっていた私は、サッカー部の生徒たちを連れて、夏休み一ヶ月、石岡の校地で合宿したのです。ご存知のように、石岡には、木月とは違って、手頃なグラウンドがいくつかあり、広く大きなグラウンドもあります。不思議に思ったのは、そのグラウンドの隅の方に、数基の碑があり、よく見ると「愛馬の碑」と刻してあるのです。石岡の管理人さんに聞くと、馬術部の顧問・山本教授が愛馬の死をいたみ、建てさせたのですと教えてくれました。

先生は、学生たちと共に、馬にまたがり広いグラウンドをかけていたそうです。或は、かつて広い大陸をめぐった日々のことなど馬上で思い出していたかも知れません。

いつ頃だったでしょうか。本務校の学生たちと軽井沢で研究会を行なった帰り、天照大神のこもった岩屋の戸を手力男命がとりはずし、はるかかなたへとばし、突き立ったのが戸隠山だという伝承のあることを知って、この伝承を調べるために戸隠まで出かけたことがありました。こんな伝承が既に近世期以前からあったということ、尖った戸隠山を背景に手力男神社が建てられているということしか知ることができませんで、少々がっかりしたのですが、そんなことを山本先生に話しましたところ、先生は、旧制中学の高学年の頃、善光寺の裏側から続く、あのきびしい坂道

Hosei University Repository

を徒競走で戸隠までかけあがらされたことがあると話されました。戦前、私の住んでいた神戸の県立一中などでも、大正期、湖畔の坂本から延暦寺まで強行軍したと恩師が語っていましたから、旧制の中学では、そんなイベントがどこでも実施されたようです。ちなみに、きびしい山道のない県立明石中学などは、対岸の淡路の先まで遠泳し、明石海岸へひっかえしたそうです。永々と余談を連ねましたが、そんな先生の話から、山本先生が信州で旧制中学をおえられたことを知りました。

その後、先生は金沢の旧制高校へ進学されました。金沢には当時の高校（四高）の校舎がそのまま残っていますが、先生の使われた教室も机も昔のままに存在するということです。この金沢の高校時代に、伊波普猷の『古琉球』に接し、南西諸島に関心を寄せるようになったといくたびか聞かされました。

旧制高校を終えた先生は、東京帝国大学へ入学。経済学部に籍をおいたようですが、周知の昭和十八年十月の学徒動員で徴兵され、内モンゴルへ渡り、任命された部隊の指揮に当たられたそうです。いわゆる予備士官をつとめられたと思いますが、食料不足の中、盗みを働く兵もあって、何かと苦労されたと話しておられました。そんな先生たちの部隊がシベリアに抑留されたのかどうかは詳しい話を聞いておりません。

敗戦後、いつ帰国されたのかもはっきりは知りませんが、帰国後、さっそく大学の学務課を訪ね、自分の学籍がまだあるか否かを尋ねられたそうです。やおら窓口へ出てきた学務課の職員が「山本君、君の学籍、まだあったよ」と告げられた時は、天にも昇るような喜びであったと先生はよく話しておられました。

大学へ復帰した先生は、以後、まっしぐらに学問の道を歩まれたようで、この学生時代に、新制鹿児島大学の教授原口虎雄氏らとも交流していたようです。この頃、ついでに奄美諸島を訪ねられたのではないかと考えられます。それは、トカラ列島口の島以南→与論島までが米軍の信託統治に置かれる前だと考えるからです。ただ、先生がいつ頃、大学を卒業し、法政大学の教員になられたのかは存じません。

Hosei University Repository

山本先生に、実際にお会いしたのは、沖縄が日本に復帰し、本沖縄文化研究所が法政に創設され、私も所員に加えて頂いてからです。当時は、いわゆる七十年安保闘争の激しかった時代で、山本先生は学生部長などを努め、ご苦労なさっておられたようですが、研究所主催の研究発表や公開講座なども積極的にこなしておられました。当時、市ヶ谷駅近くのビル内に仮教授室を設けたことがありましたが、そこで山本先生は研究発表をされました。話される前に、机上にあった『ブリタニカ』を静かに読んでおられましたのを忘れることができません。その他、都心の講堂で行なわれた本研究所主催の講演会や鹿児島大学で開かれた南島史学会での研究発表も拝聴させていただき、先生を中心とした渡名喜島の調査にも参加させて頂きました。また、計六年に及んだ久米島調査でも、ご一緒したことを忘れることができません。

山本先生から多くのことを教えられましたが、以下に先生のたてられた新たな学説を紹介しておきたいとおもいます。

一、原初の稲田の形態

初期の稲田は、田のマスも小さく、この小さなマスの田を、山の上部から順に、二～三または四～五個まとめて集め、これに水量の少ない沢水を流して田んぼとし、これらの小水田を見下ろせる高台に、二軒ほどの民家を建て、ここから田んぼ全体を見張り、猪害などを防いだ。

このような形態の田んぼを「迫田（さこだ）」といい、鹿児島や沖縄・久米島の稲田の初期形態は、このようなものであったという。なお、鹿児島に、「迫田」をはじめ「大迫」「小迫」という氏名の多いのも、この稲田の形態に依るものだということです。

鹿児島や沖縄で、このような形態の田地を見たことはありませんが、岡山駅の西方に存在する鬼之城の北側に、迫

Hosei University Repository

田がそのまま残されています。猪害がひどいらしく、広い迫田の周辺をトタンで囲っていました。周知のとおり、鬼之城は、宇羅伝説、桃太郎説話で有名です。また、谷川健一先生に招かれて、熊本での地名研究会に参加したことがあり、その折、通潤橋周辺の山間の田地を訪ねましたが、この地にも迫田がありました。ただ、それは大迫ともいうべきもので、棚田に近いものでした。奄美諸島では、徳之島に迫田に類する田地があります。徳之島町徳和瀬の「ヤマグスク（山城）」などは明らかに迫田です。井之川岳の中腹にあるのですが、どうやらこの集落の始源は、こんな山地にあったようです。ついでに申せば、今日なお、諸説ある「グスク」とは何かということです。東アジアから東南アジアをめぐってみて、思うのは、川辺より小高い不便な山地に人々の住む集落の多いことです。それは他族からの攻撃を防ぐためで、沖縄でもこのような防衛の機能を持つ集落を「グスク」と呼んだのではないかと思われるのです。

ところで、山本弘文先生のご説によれば、迫田によって稲作を始めた人々は、やがて、扇状地に大きな川の水を引き込み、より広い水田を作り、そのそばに家屋を作り、山々から移り住むようになる。こうして今日に続く村落が形成されたということです。その形跡は、全国各地にあるといってよいでしょう。前述の徳之島では、大きな川、井之川をはさんで、四つの集落から成る「井之川」などがその典型です。

私事にわたり恐縮ですが、私は昭和七年神戸市に生まれ、同十三年、烏が原の水源池が破壊して大水害を及ぼした町の実景を見、生まれて初めて恐ろしい経験をしました。棒状になった人間の死体が、湊川をいくつも流れていくのを見ましたし、元町のソゴウの前に大きな岩石がころんでいるのも見ました。水道から水が出ず、バケツを下げて、給水車のうしろに長い列をつくったことをおぼえています。

翌十四年四月、小学校へ入学。三宮の西側の上山手・中山手・下山手には白系ロシア人やユダヤ人、中国人などが住んでいましたが、忘れがたいのは、二年生の冬、昭和十六年二月、神戸港のメリケン波止場に、ユダヤ人の親子が、厚いオーバーを着、ミンクの上等なマフラーを首に巻き、長い列を作って船を待っていたことです。大人は大き

Hosei University Repository

なカバンを持ち、乳飲み子もいて、みんなちぢかんでいるようで、あわれにも思えました。おそらく強制移住にちがいありません。その後、白系ロシア人らはどうなったのでしょうか。当時、神戸の山の手は空き家も多かったと聞いています。

周知のように、同年十二月八日、日本軍が、ハワイのパール・ハーバーを攻撃し、大東亜戦争が開始されます。翌、十七年二月、シンガポールを陥落。学校近くの和田神社までちょうちん行列をしましたが、同年四月、四年生になって間もなく、米軍の空襲を受けました。忘れもしません、四月十八日、正午近く、空襲警報が鳴り、広場へ出て見ると、東から西へ黒い飛行機の影が空を横切って消えました。大阪の天宝山から高射砲を撃ったが、あたらなかったそうだとか焼夷弾がおとされたそうだなどと、人々がうわさしていました。後の調査記録によれば、これが日本最初の空襲で、飛行機はB25一機、神戸の空襲地域は現兵庫区、死者が一名でたとのことです。私の住まいの近くが空襲されていたのです。飛行機は、中国へ飛んで行ったと言われていますが、おそらく艦載機にちがいありません。

ところで、この空襲以降、学校でも軍国主義的な傾向が強くなったと思われます。図画の時間に、英米の旗を足で踏みつける絵を描かせたり、校庭で飛行士の訓練用回転器を体操の時間に使わせたりしました。ポストを郵便受けと言わせたり、英語読みを敵国語読みとして禁止するのも同じ傾向です。パーマネントの髪型なども嫌われました。家の床下を掘って防空壕とし、防火訓練もひんぱんに行なわれました。そんな或日の深夜、戦車が轟音をたてて西に向かって行ったのを忘れることができません。三十台もいたでしょうか。三菱重工業あたりで新造されたもののようです。

食料も配給制となり、昼食はコッペパン一個が与えられ、配給米もタイなどの外米が多かったのです。そんな折、担任教師が、家庭の出身地を調べたことがありましたが、朝鮮半島の出身者は特に注視したのを覚えています。戦況がきびしくなっているのを痛切に感じました。

Hosei University Repository

翌十八年、学童疎開が通知され、私どもは、家族揃って父母の郷里へ移住することになり、七月下旬、神戸を発って、鹿児島へ向かい八月になって、ようやく船が出ることになり、夜、七島の島影を隠れるように辿りながら、名瀬港経由、同月の三日夕刻、やっとの思いで徳之島亀徳港に上陸しました。

同年秋、同島浅間に、知覧の前線基地としての浅間空港の建設が始まり、翌十九年には完成して、四十を過ぎた島民男性全て防衛隊として、浅間に勤めるようになり、重要な労働力を失って島民は困っていたのを忘れることができません。

忘れられないのは、同十九年秋、亀徳港の沖で、輸送船が潜水艦に撃たれ、轟音をたてて沈没、乗っていた数百名の兵士が死体となって流れ着き、この亡がらを駐留軍の兵隊たちが桝形に組んだ材木の上に放り込み、火をつけて焼いていたのが忘れられません。

以後一年七ヶ月、徳之島に在住しましたが、翌二十年三月、奄美本島へ渡り、名瀬に在住。空襲の危険の中で、郡内唯一の旧制中学を受験。合格して以後同校で学びましたが、この間、先輩や先生方から多くの教えを受けました。そんな中で、最も影響を受けたのは、文英吉先生だったと思います。先生は、戦前、既に奄美に伝わる民謡を集めて、『奄美民謡大観』を著しておられ、当時も郷土史家としても有名で、新たな史実の発掘にもつとめておられました。

戦前、東京で白樺派の人々と共に活動された詩人、泉芳朗先生は、恩師でもあり、精神的な影響を受けています。

奄美で教えられたことで最も私をひきつけたのは、島津藩の過酷な島民支配でした。

各島に薩摩から派遣された藩士を代官として置き、租税として黒糖をきびしく取り上げた。その直接の任に当たったのは、島出身のキビ横目であったという。代官は島の女を現地妻とし、その要請に応じない女は殺されることもあったという。代官の要請をこばんだカンツメは、焼き火箸で陰部を刺されて殺されたという。恋人に操を立てたカンツメは、今になお民謡として謡われている。

Hosei University Repository

幕末、奄美本島龍郷に流されていた西郷隆盛は、代官や藩士の目に余る横暴さを強く諫めたと加計呂麻島出身の著名なロシア文学者、昇曙夢が伝えています。

ちなみに、口之島以南の島々にも代官所が置かれ、その跡地が残っているが、七島の島では、飛び魚の干物や鰹節を租税として納めたようです。

二、島津の雄藩化について

以上に記したようなわけで、私など島津藩の収益の多くは、奄美諸島の黒糖によって得られたものだと考えていましたが、このような考えを真っ向から批判したのは、山本弘文先生でした。

周知のように、琉球ははじめ中国からの支配を受け、後、島津藩が江戸時代初期に中山王（首里）を攻撃、奄美諸島五島をいわば植民地として支配、島津の直割領としたのです。そのため、未だに、これら五島は、鹿児島県に入れられています。沖縄本島とその周辺の島と宮古、八重山が琉球国となりました。琉球は、明朝以降の中国と江戸時代以降の島津との二国に支配を受けることになるのです。新築した首里の城の両脇に中国館と島津館が置かれたのも、そのためですが、山本弘文先生によれば、島津藩は、自らも中国と琉球との貿易に関与し、巨万の収益を得ていたというのです。先生は、鹿児島大学で開催された学会でも、具体的な資料を示して、このことを指摘しておられましたが、この学説は、先生が初めて発表された新しい学説であることは、まちがいありません。東大の文書館に収められている島津文書がいっこうに整理されないと嘆いておられましたが、いくらか重要な文献は見られたようです。

島津藩士が、琉球人に化けて貿易船に乗り込み、中国をはじめ東南アジアの島々との交易を経て富を獲得する方法で、二百年余に及ぶその収益は、莫大なものであったといわれています。南西諸島で南蛮物といわれているのも、交

Hosei University Repository

易品の一つですが、こうして得られた品々は、幕府から見れば、密貿品になるわけで、薩摩半島南端坊之津には、このような密貿品を隠す貯蔵庫があり、現在では公開されています。

山本先生は、島津藩が、幕末、討幕運動を実行し維新政府樹立の原動力となり得たのも、琉球王府を支配下に置き、そこから収奪した巨万の利益を資金として活動することができたからだと指摘しておられました。

三、沖縄の地割制度について

六年にわたる久米島調査の後、私どもは、渡名喜島の調査にかかりました。それは、この島が、沖縄特有の土地制度、地割の遺構が残されているといわれていたからです。

私は、ウタキやマキョを中心に集落の構造を調べたり、辻ごとに置かれた石敢当を調べたりしました。その成果は、報告書に詳記してあります。

幸い、島の役場に古い土地台帳があって、山本先生たちは、これを複写して資料として収集しました。周知のように、沖縄の地割制は公地公民制で、土地の私有を認めず、平等に村の人々に分配する制度です。最近まで、この制度をとっていた久高島では、土地の私有を認めることになり、ハワイやブラジルなど外国へ移住している人々も呼び戻し、土地を島民全員に平等に分配したそうです。

山本先生は、久高島へ行き、この島の人々がどのように分配するかなど詳細に調べたようです。山本先生は晩年に至るまで、沖縄の地割制に関心を寄せられたようで、近年発行の『経済志林』にもこのことについての論文を寄せておられます。

先生がこのような研究を続けられたのは、沖縄社会の基層に金銭的利益を追う余りに、闘争をくり返す現代社会を

Hosei University Repository

超える可能性が秘められていると考えていたからに違いありません。

戦争の危険にさらされた少年期、駐留軍の軍政の中で抑圧されながら生きた青年期を送った私は、もと来た道をたどりつつある最近の政治状況も許すことができません。

山本先生のご研究や数々のお教えは、現代のゆがみをうちやぶり、新たな地平を開く知恵や勇気を与えてくださったように思われます。先生ありがとうございました。先生のご逝去が惜しまれてなりません。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

合掌